

戦争と国家、そしてナショナリズム

福田 宏 hfukuda@juris.hokudai.ac.jp

<http://hfukuda.cool.ne.jp/hokudai04a/>

(法学部 321 号室・706-3784)

(相談時間： 7/22(木) 15 時～17 時)

I. 最終レポート締切は、7 月 27 日(火) 17 時 (事務室前レポート・ボックス)

28 日(水) 正午 (掲示板で面接時間の告知)

28 日(水) 時間の変更を希望する者は 17 時までにメールで連絡

30 日(金) 9-12 時 (面接・希望者のみ, E320)

- ・ 2000 字以上、テーマは自由
- ・ 締切厳守
- ・ 参考にした文献、資料を明記すること
- ・ 面接を希望する者は、その旨明記すること (希望時間も)

II. イスラエルとパレスチナ —— 解のない方程式？

1879	「反セム主義」という言葉が広まる —— 新しい反ユダヤ主義
1894	ドレフェス事件
1896	テオドール・ヘルツルによる『ユダヤ人国家』出版
1897	第 1 回シオニスト会議 (バーゼル)
1914	第一次世界大戦(-1918)
1915	フサイン・マクマホン往復書簡(-1916)
1916.5	サイクス・ピコ協定
1917	バルフォア宣言
1948.5.14	イスラエル建国宣言、第一次中東戦争 (イスラエル独立戦争)
1956	第二次中東戦争 (スエズ戦争)
1964	PLO (パレスチナ解放機構) 創設
1967	第三次中東戦争 (六日戦争)
1973	第四次中東戦争 (十月戦争)
1982	イスラエルによるレバノン侵攻、PLO が西バイルートより退去
1987-	第一次インティファダが始まる
1993.9.13	オスロ合意
1995.11.4	ラビン首相暗殺
2000-	第二次インティファダ
2002.6	イスラエルがヨルダン川西岸に「壁」を建設し始める
2002.6.24	ブッシュ大統領が「ロードマップ (行程表)」を発表

1. ユダヤ人は民族なのか、人種なのか、それとも宗教なのか？

- ・イスラエルの風景（人口 620 万人、その内ユダヤ人 81%）
- ・スパイに適した国民性？ —— モサドの活躍
- ・3つの対立軸 —— 宗教的か世俗的か、それとも「伝統的」か
アジア・アフリカ系かヨーロッパ系か
アシュケナジー、スファラディー、ミズラヒ
大イスラエル主義か、アラブとの和平優先か
- ・国民皆兵制 —— 18歳より男子3年、女子2年弱の徴兵、45歳まで予備役

2. 反ユダヤ主義から「反セム主義」へ —— 誰がユダヤ人か？

- ・宗教から人種への転換（19世紀後半）
ドレフュス事件の衝撃
コインの表裏としての反セム主義とシオニズム
- ・社会ダーウィニズムと科学の発展
都市化についていけない者たちの不安
- ・ナチズムにおけるユダヤ人の定義（1935年）
4人の祖父母（父方、母方の各2名ずつ）のうち3人以上がユダヤ教徒であった場合、本人は自動的にユダヤ人と認定される
- ・イスラエルにおけるユダヤ人の定義 —— 「帰還法」
基本的には「母親がユダヤ人であるか、あるいはユダヤ教に改宗した者で、かつ他の宗教の信者ではない者」であるが、「ユダヤ人の子供及び孫、ユダヤ人の配偶者、ユダヤ人の子供ないし孫の配偶者」にも同様の権利が与えられる。

3. イスラエルの登場とパレスチナ問題

- ・イギリスの三枚舌外交
フサイン＝マクマホン書簡、サイクス・ピコ協定、バルフォア宣言
「アラビアのロレンス」の活躍
- ・過剰防衛の問題
4回の中東戦争、レバノン侵攻、そしてパレスチナに対する「報復」
シャロン政権(2001.3.7-)とハマスの悲劇的な共犯関係
- ・アメリカは何故イスラエルを支持するのか
ユダヤ票の重み —— 人口比にして 2,3%だが...
「キリスト教原理主義」におけるイスラエルの重要性
ネオコンのイスラエルへの肩入れ
- ・ハト派ラビンとタカ派シャロンの意外な「柔軟性」 —— 労働党とリクード
ラビン:「奴らの骨を、手を、足をたたき折れ！」
(1980年代後半、インティファダに対して)

III. イスラエルとパレスチナに関する参考文献 —— 新書を中心に

- ・白杵陽『世界化するパレスチナ — イスラエル紛争』(新世界事情), 岩波書店, 2004.
- ・横田勇人『パレスチナ紛争史』集英社新書(244), 2004.
- ・芝生瑞和『パレスチナ』文春新書(370), 2004.
- ・宮田律『中東 — 迷走の百年史』新潮新書(71), 2004.
- ・広河隆一『パレスチナ 新版』岩波新書(新赤 784), 2002.
- ・森戸幸次『中東百年紛争 — パレスチナと宗教ナショナリズム』平凡社新書(118), 2001.
- ・立山良司『揺れるユダヤ人国家 — ポスト・シオニズム』文春新書(87), 2000.
- ・E. W. サイド, 中野真紀子他訳『戦争とプロパガンダ』(計 4 冊), みすず書房, 2002-03.
- ・岡真理『記憶／物語』(思考のフロンティア), 岩波書店, 2000.
- ・ウォルター・ラカー, 高坂誠訳『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』(新版), 第三書館, 1994.
- ・サンダー・L. ギルマン著, 管啓次郎訳『ユダヤ人の身体』青土社, 1997.

IV. 「人道的介入」をめぐるグループ討論の続き

最上敏樹『人道的介入 —— 正義の武力行使はあるか』岩波新書(新赤 752), 2001 年.

- ・「絶対平和主義」と「絶対倫理」との対決

武力行使は許されない vs 他者の苦しみを放置することはできない

「人の苦しみはそれを見た者に義務を負わせる」ポール・リクール

- ・《狭義の人道的介入》と《広義の人道的介入》

狭義 —— 甚だしい人権侵害や非人道的状況を中止させるためという理由で、
個別国家が、国連の要請によらず自らの独断で武力行使を行うこと。

広義 —— 非人道的状況におかれた人々を救うためのあらゆる行為

V. 推薦文献 —— 「人道的介入」に関連して

- ・長谷部恭男『憲法と平和を問いなおす』ちくま新書(465), 2004 年.
- ・篠田英朗『平和構築と法の支配—国際平和活動の理論的・機能的分析』創文社, 2003 年.